

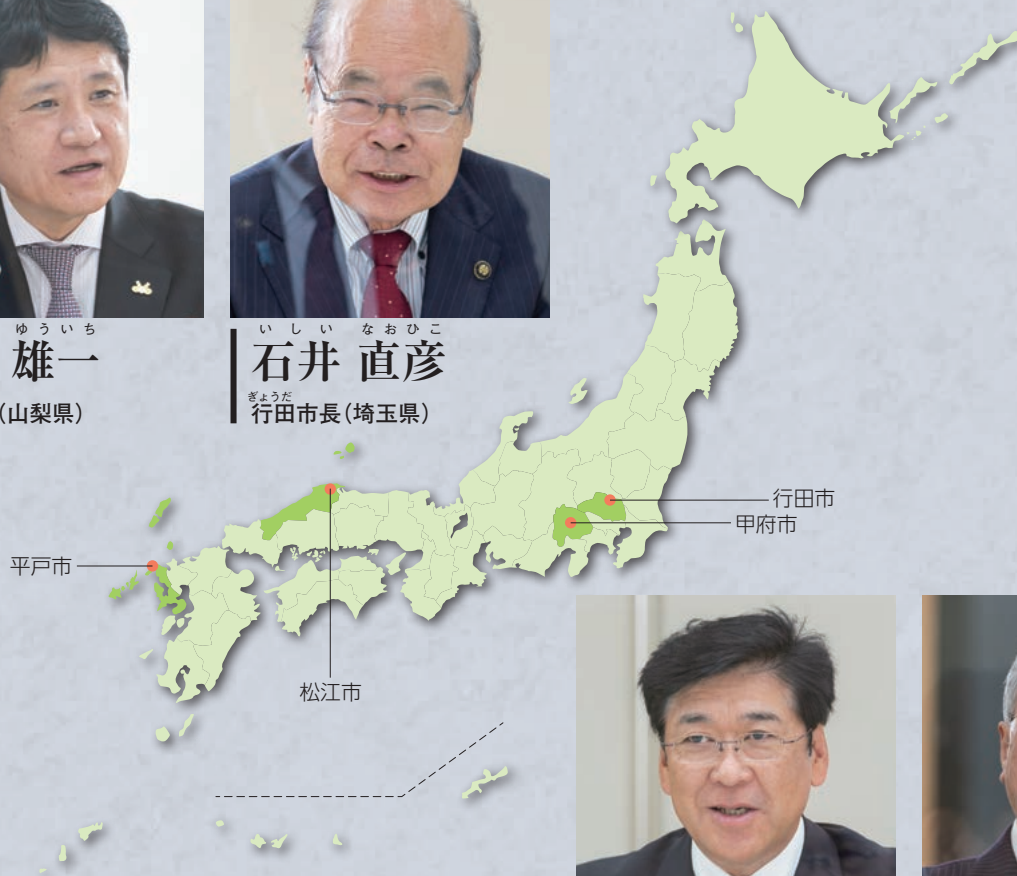
地域の文化資源 「城」を活用したまちづくり



ひぐち ゆういち
樋口 雄一
こうふ 甲府市長(山梨県)



いしい なおひこ
石井 直彦
ぎょうだ 行田市長(埼玉県)



司会・コーディネーター
おおたに もとみち
大谷 基道
とくあつ 獨協大学法学部教授



くろだ なおひこ
黒田 成彦
ひらど 平戸市長(長崎県)



まつうら まさたか
松浦 正敬
まつえ 松江市長(島根県)



組みなど、幅広くお話し
いただきました。
(本文中の役職名・敬称は
一部省略しています。ま
た、感染症防止用のアク
リルパネルを使用してい
るため、一部写真に映り
込みがあります)

まちの魅力を高める歴史的・文化的資源の一つである「城」。明治初期に取り壊された城も多数ありますが、後年になり、シビックプライドにつながる資源として、天守の復元などを進めた都市も少なくありません。かつての城下町を中心に、現在の中心市街地が形成されている都市も多く、にぎわい創出の核として、城を会場とした地域イベントや各種行事が数多く開催されています。また、城を後世に継承すべく、保存・修理などの事業を計画的に進める自治体も多数あります。

座談会では、城を活用したまちづくりを進める石井・行田市長、樋口・甲府市長、松浦・松江市長、黒田・平戸市長にお集まりいただき、それぞれの城の成り立ちやまちづくりの内容、城を生かした観光施策、シビックプライドの醸成に向けた取り組みなど、幅広くお話しいただきました。

城とともに成長するまちへ

大谷 地域を代表する歴史的な資源として、多様な活用が図られている「城」。近年は、城巡りがブームとなるなど、観光資源としても大きなポテンシャルを持っています。

それでは、それぞれの城の特徴や城を活用したまちづくりの内容などについてお話ししたいと思います。

石井 行田市には関東七名城の一つで、15世紀

忍城を核に地域資源を
最大限に生かしながら、
DMOを中心とした
「稼げる観光」を
確立させたいですね。



石井 直彦
行田市長(埼玉県)

後半に北武蔵の武将・成田氏が築城した「忍城」があります。この忍城は、戦国時代末期、豊臣秀吉の小田原征伐に伴う攻城戦で、石田三成が率いる大軍をわずかな兵で退けたという史実が残る城です。石田軍の水攻めに耐え抜いたことから、別名「浮き城」とも呼ばれ、その逸話は今なお市民の誇りとして語り継がれています。

忍城は明治6年に廃城となり、競売に掛けられた後、解体の憂き目に遭いましたが、昭和63年に御三階櫓を再建。内部は行田市郷土博物館の展示室として活用され、行田の歴史を今に伝えています。また、市内には、忍城の他にも、東日本随一の規模を誇り、国の特別史跡にも指定された「埼玉古墳群」など、古代から現代に至る歴史、文化遺産が数多く残っています。

行田市では市の中心部に位置する忍城を核に、これらの観光資源を最大限に生かしながら、にぎわいの創出や回遊性を向上させるための取り組みを進めているところです。

樋口 甲府市は武田信虎により造営された居館「武田氏館跡」、その詰城として築かれた山城「要害山城」、武田氏滅亡後、豊臣秀吉配下の浅野長政らによって築城された「甲府城跡」(舞鶴城公園)と、三つの城郭施設を有するまちです。また、昨年(令和元年)は信虎が居館を築き、城下町の整備に着手してから500年、来年(令和3年)は武田信玄公の生誕から500年と、歴史的な節目の時期に当たることから、甲府市では平成28年から5年間にわたり「こうふ開府500年記念事業」を展開しています。先人たちが築き上げた多様な歴史・文化を学び、今そして未来の甲府を考える機会とするための事業です。これまで市民・企業・団体が一丸となつ

て各種イベントを開催してきたほか、武田氏3代の歴史を伝える「甲府市武田氏館跡歴史館」(信玄ミュージアム)も整備しました。

さらに甲府市では、甲府城周辺地域の回遊機能の向上と誘客促進などを目的に、山梨県と共同で「甲府城周辺地域活性化実施計画」を策定しました。現在この計画に基づき、甲府城周辺の観光資源をつなぐ回遊ネットワークの形成や、甲府城南エリアの開発などに取り組んでいます。

松浦 松江城は、戦国武将・堀尾吉晴の手によって、慶長12年(1607年)から同16年(1611年)にかけて造られました。明治の初めに廃城令が出されたものの、地元有志により買い戻されたことから取り壊しを免れ、今な



昭和63年に再建された忍城・御三階櫓(行田市)

市民に地域への愛着・誇りを持ってもらうためにも、まずは地域の歴史を知っていただくことが重要です。



樋口 雄一
甲府市長(山梨県)

お江戸期の姿をとどめています。また、松江は松江城とともに発展してきたまちで、掘割や町並みを含め、かつての城下町の構造が今でも色濃く残っています。

戦前は「国宝」に指定されていた松江城でしたが、戦後、文化財保護法の成立で、国宝指定の基準が変わり、「重要文化財」への指定を余儀なくされました。しかし、平成24年に行った市史

編さん事業に伴う基礎調査において、祈禱札が発見されたことで、江戸初期の建築であることが証明され、平成27年、悲願の国宝再指定に至りました。

松江市では、これまで天守の耐震対策や石垣修理、防火対策など、城内の整備に力を入れてきました。加えて、歴史的建造物の保全継承、良好な景観形成の創出など、城下町の整備にも取り組んできました。さらに、平成23年に松江開府400年を迎えるに当たり、松江の歴史を生かした「まちづくり」とそれを担う「ひとづくり」を進めるため、平成19年から5年間にわたり「松江開府400年祭」を開催しました。

黒田 平戸松浦氏26代当主の松浦鎮信公(平戸藩初代藩主)は、慶長4年(1599年)、平戸城の前身となる日の岳城を築きました。しかし、その翌年、関ヶ原の戦いで東軍が勝利したことを受けて、自ら城を焼き払います。豊臣秀吉と親交があった自身に対する家康の疑念を払拭するためとも伝えられています。その後90年の間、御館に構えた居宅を政庁として用いました。やがて、幕府の信頼を勝ち得た5代藩主松浦棟公が再築城の許可を得て、享保3年(1718年)に平戸城を築城。他の多くの城と同様、明治初期に廃城となったものの、戦後になって城の再建を望む声が高まり、昭和37年に市が天守と櫓を復元しました。

それから60年近くが経過した現在、平戸市では市の未来像「夢あふれる 未来のまち 平戸」の実現に向けて策定した「シン・平戸創生プロジェクト」に基づき、この平戸城の積極活用を進めています。老朽化した各施設の長寿命化を図る大規模改修に加え、海に面した懐柔櫓の宿泊施



甲府城跡(舞鶴城公園)と霊峰富士(甲府市)

設化に向けて、改装工事も進めました。日本初の「泊まれる城」、いわゆる「城泊」として、来年(令和3年)4月の開業を予定しています。

城がもたらす活性化効果

大谷 各都市とも城を活用して、さまざまな取り組みを進めていることが分かりました。それでは次に、城をどのように地域活性化に結び付けようかとされているのか、お聞かせください。

石井 地域の伝統産業である「行田足袋」が「伝統的工芸品」に指定されたのが昨年(令和元年)の11月、市内の埼玉古墳群が国の特別史跡に指定されたのが今年(令和2年)の3月。二つの指定を追い風に、今年は地域を大いに盛り上げる



江戸時代の姿をとどめる松江城天守(松江市)

絶好の機会でしたが、コロナ禍の影響で思い通りにはいきませんでした。行田市にはこうした歴史資源以外でも、「田んぼアート」や「フラワーアート」、さらには42種類約12万株の蓮の花が咲き誇る「古代蓮の里」など、通年で楽しめる魅力的な資源が豊富です。コロナ収束後は、市民はもとより、多くの観光客に「まち歩き」を楽しんでいただき、地域振興につなげたいと思います。

樋口 甲府市最大の祭りは、4月初旬に開催される「信玄公祭り」です。市内外から約1500人もの甲冑を身に着けた軍勢が中心市街地を練り歩く「武者行列」が人気で、毎年、海外を含め多くの観光客が訪れます。また、舞鶴城公園を舞台に、8月に開催する「小江戸甲府の夏祭り」も新たな夏のイベントとして定着しつつあります。



フランス・ボルドー市の
取り組みを参考に、
松江城をはじめ、
公共空間の活用を
推進していきたいですね。

松浦 正敬
松江市長(島根県)

さらに甲府市は、南に富士山、北に八ヶ岳、西に南アルプスと、周囲を山に囲まれた「山の都」であり、国内外から多くの登山客が訪れます。また、ワイン文化も根付いています。首都圏に近い地域性を生かし、マイクローツーリズムの定着を図る一方で、令和9年のリニア中央新幹線の開業に向けて、インバウンド観光の振興にも力を注ぎたいと考えています。

松浦 ある歴史作家が、「歴史や文化の裏付け

がない観光は、浅薄なものにならざるを得ない」という話をされたことがあります。私もその意見に賛成です。実際、松江市では桜開花時の「お城まつり」、堀を小船で巡る「堀川遊覧船」など、松江城やその城下町を生かした観光を展開してきました。地域に根付いた歴史文化こそが、松江らしさそのものであり、重要な観光資源であると考えています。

また、歴史文化を生かしたまちづくりを効果的に進めるため、「都市計画」と「文化財保護」を一体的に扱う「歴史まちづくり部」を新設するなど、市役所の組織改編にも取り組みました。

黒田 王族や貴族の城を宿泊施設として活用した観光は、欧米では珍しくありません。実際、平戸市でも平成29年に運営会社と共同で、平戸城天守に無料で1泊するカプセルを募集する「平戸城キャスルスステイ無料宿泊イベント」を実施したところ、国内外から約7400組の応募があり、その5割強が海外からでした。

これが決め手となって、欧米を中心とした富裕層層をターゲットに、平戸城・懐柔櫓を一晚貸し切りで泊まれる、常設の「城泊」施設の開業に取り組むことになりました。定員は1日1組5人までで、宿泊費の上限は1泊60万円を設定。ファーストクラスのおもてなしをテーマに、体験メニューの充実も図りながら、付加価値の高い観光を目指しています。

城が郷土に対する誇りを育てる

大谷 城はまちの顔であり、地域の成り立ちを市民に伝える貴重な資源です。シックプライドの醸成に向けて、どのような施策を進められていますか。

海外の富裕者層をターゲットに、 平戸城・懐柔櫓を 一晩貸し切りで泊まれる 「城泊」の取り組みを進めます。



黒田 成彦
平戸市長(長崎県)

石井 大人への意識醸成も大切ですが、まずは子どもたちへの働き掛けが必要だと思っています。遠足をはじめとした学校行事を通じて、小学生や中学生に、地域の歴史遺産に触れてもらい、ゆくゆくは中学生に観光ガイドを担ってもらえたらうれしいですね。そうした取り組みを積み重ねる中で、子どもたちは地域に対する愛

着や誇りを抱くようになると思います。

樋口 市民に地域への愛着・誇りを持つってもらうためにも、まずは地域の歴史を知っていたことが重要です。現状は、地域の中であまりに信玄公の存在が大きいためか、「甲府城は信玄公が築いた城」と勘違いされている市民も少なくありません。

そこで、「こうふ開府500年記念事業」では、市民自らが地域の歴史や文化を再認識する機会をつくろうと「私の地域・歴史探訪事業」を行いました。自治会連合会が主体となって、地区の大人と子どもたちが一緒に地域を散策し、史跡の由来などを調べたりする事業で、3年余りの間に、全31地区で取り組みが行われました。

松浦 歴史まちづくりを進める上で、その基盤となるのが、地域に対する市民の愛着や誇りです。松江市では、江戸時代から根付いている茶の湯の文化と産業を守るために、「松江市茶の湯条例」を制定しました。また、来年(令和3年)4月施行を目指し、茶の湯に限らず、松江に根付く文化全体まで範囲を広げた「松江の文化力を生かしたまちづくり条例」の制定にも取り組んでいます。

黒田 シビックプライドの醸成の前提となるのは市民の一体感ですが、平戸市において、これは極めて難しい問題です。平戸市は複数の島から成り立っていることに加え、本島自体も南北に長い構造で、集落が点在しています。そうした地域性もあり、市民の一体感はなかなか根付きませんでした。

この状況を一変させるためにも、「城泊」の取り組みを何とか成功させたいと考えています。これが市外の人から評価を受け、まちの注目度



城泊施設として令和3年春開業予定の平戸城・懐柔櫓(中央)。左は天守、右は見奏櫓(平戸市)

も上がることで、多くの市民が改めて平戸城の素晴らしさを再認識し、市の一体感が育まれる。それをきっかけに、地域に対する誇りが醸成されていく。そうした変化を期待しています。

松浦 シビックプライドの醸成にとどまらず、市民主体の活動をいかに活発なものにするか、という問題も重要です。松江市では、国宝指定5周年を迎えた今年、市民の手で松江城を保存・活用・継承するため、「松江城を守る会」を設立しましたが、悲願だった国宝指定を実現させた後でもあり、なかなか具体的な活動を見い出せませんでした。

そうした中で、今、期待を掛けているのが、既存の市民団体との連携です。既に実績がある



大谷 基道
獨協大学法学部教授

のですが、市内の環境団体が「松江城を守る会」と連携する形で、松江城をテーマにした学習会を開催しました。これにより、双方が松江城の歴史と環境を学ぶことで、環境団体としても活動内容が広がり、守る会としても新たに活動の展望を開くことができるなど、双方でメリットを確認できました。この取り組みをヒントに、今後守る会と他の既存団体の連携を促していきたいと考えています。

今後のまちづくりを展望する

大谷 最後に今後の展望などについて、各市長のお考えをお聞かせください。

石井 行政主導ではなく、民間主導の「稼げる観光」を確立させたいですね。利益を上げられるからこそ、まちづくりや観光の取り組みも長続きがするし、地域に雇用も生まれます。DMOを中心とした、持続可能な観光振興を地域に根付かせていきたいと思っています。

樋口 甲府市では、甲府城南エリアに「子ども屋内運動遊び場」を来年(令和3年)4月にオープンすることにしています。「こども最優先のまち」の実現に向けた、子育て・子育て支援の一

環としての取り組みですが、親子で遊び場を訪れることで、地域の歴史資源である甲府城跡におのずと触れることとなります。ぜひ、こうした施策も組み合わせながら、一人一人の市民が自らの言葉で、郷土の素晴らしさを語ることができる。そうした地域をつくり上げていきたいですね。

松浦 平戸市では、平戸城を積極的に活用することですが、私も公共空間の利活用を活発に進めるべきだと考えています。参考になったのが、視察で訪れたフランス・ボルドー市の取り組みです。ボルドー市では、河川敷の空間を公的団体に委託し、その団体が河川敷の活用を望む個人・団体に貸し出す仕組みを構築していました。このボルドー市の仕組みを参考に、松江城をはじめ、まちなかの公共空間の活用を具体的に推進していきたいと考えています。

黒田 本日、座談会に参加したこの4市以外にも、城を持つ都市は数多くあります。全国市長会としても、それぞれのお城自慢を繰り広げる機会をつくっていただきたいと思います。それ自体が国内の一体感の醸成につながるし、「似て非なる」各地の城郭を比べ合わせることで、それぞれの地域が盛り上がるなど、相乗効果も出るでしょう。城をテーマとした、都市間連携にもつながれると思います。

大谷 本日は城を活用したまちづくりをテーマに、活発にご議論いただきました。城は地域を活性化する観光資源であるだけでなく、地域のシンボルとして、将来世代を含め、地域に対する市民の誇り・愛着にもつながられる重要な地域資源であることも分かりました。

今後の地方行政を見据えると、財政的にも、



人材的にも限られたリソースで地域経営を行わなければならないかもしれません。そうした条件の下でも、質の高い公共サービスを維持するためには、幅広い市民との協働が不可欠でしょう。地域への強い思いを持ち、主体的にまちに関わる市民を一人でも増やしていく。城を活用したまちづくりは、行政のパートナーである市民を育む意味でも、重要な政策だと実感しました。今後も、市民とともに城を活用したまちづくりを推進されることを願っています。本日はありがとうございました。

(令和2年11月11日、全国都市会館にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は3月号に掲載予定です。